

パネルの主旨とまとめ

山中 弘

本パネルは、昨年の筑波大学での学会大会における、日本学術会議「哲学・倫理・宗教教育」分科会との共催のパネル「宗教的情操教育」をめぐる諸問題」に続いて、同分科会との共催によるものである。このパネルの目的は、「宗教知識教育」、「宗教的情操教育」といった二者択一の問題設定から一旦離れて、海外における宗教教育の実情を確認し、その上で日本の学校の現場で行われている、広い意味での宗教（・道徳）をめぐる教育の現状を明らかにして、日本の宗教教育の特質と今後のあり方を模索することにあつた。

藤原聖子、矢野秀武の発表では、宗教文化を異にするイギリスとタイにおける「市民性教育」ないし「宗教教育」の実情に焦点を当て、いわば海外の教育現場での「見える宗教教育」の現状を報告した。藤原は、自らの宗教教育の六分類のうち、「異文化間の相互理解のための多文化主義」を念頭において、戦略的に、宗教学を通じて「異文化理解の幅が広がる」と呼びかけることで、教育学界内の市民性教育や異文化間教育などの推進派との連携を行うという提案を示唆するとともに、「市民性教育」を実践しているイギリスの具体的な事例を紹介した。次いで、矢野は、タイにおける公教育の一環である仏教教育の多様性について紹介し、その背景としてタイの公認（宗）教制を

明らかにし、公認の宗教および宗教団体が公的な役割を帯びていることを指摘した。さらに国家による宗教カテゴリーの形成とそのカテゴリーへの帰属意識の創出という点に着目し、これが宗教教育の土台作りに寄与していることを指摘した。

この二つの発表に引き続いて、日本の宗教教育の事例を検討する報告がなされた。もちろん、日本では公教育での特定の宗教の教育は禁止されている。しかし、現実には、知識、情操の両面において、宗教教育という形をとらずとも、「倫理」などの一般教科、あるいは「心のノート」などを通して、それらが行われているともいえる。いわば、「見えない宗教教育」があるわけであり、この「見えない宗教教育」に注目することが必要なのである。そこで、その実態について、まず江田昭道が、高校の「公民」の学習指導要領解説などの検討を通じて、仏教がインドと日本とに区別して教えられ、後者では、思想発展史的な観点から、鎌倉新仏教を中心とした日本仏教の独自性の強調が存在することを明らかにした。次いで弓山達也は、「心のノート」を官製「スピリチュアルの試み」と捉え、教育現場では、その抽象性と教えにくさが指摘されているとした。その上で、それを改善するための試みとして、京都府内の道徳教育のモデル校である二つの公立小学校、中学校の事例を紹介し、それを「地域スピリチュアリティ」の試みとして評価した。

以上の四つの発表に対して、コメンテータの土屋博は、本パネルが、日本以外の文化状況に目を向けたことを評価するとともに、藤原氏の問題提起を生産的で有効であるとした。また、矢野が紹介した、公認（宗）教制を取るタイの事例を日本の状況

パネル

との対比において注目されたとした。江田の発表に対しては、指導要領などの記述に、「根源主義」と「発展段階論」が存在しており、宗教現象の個別性が容易に一般化され得ないことに注意を喚起すべきだとした。弓山の指摘した「地域スピリチュアリティ」は、官製のそれが持っているナシヨナリズムを相対化するという意味で重要であるが、地域の特殊性の普遍化には警戒する必要があるとした。

以上の発表とコメントに対して、会場からは、宗教に係わる社会教育の中立性の問題、高齢者の看取りなどの福祉教育との係わり、さらには「地域スピリチュアリティ」のもつ問題性の指摘などをめぐって、活発な意見が交わされた。

生命倫理の問題は宗教および宗教学に

何を問いかけるのか？

代表者・コメンテータ・司会 安藤泰至

キリスト教において生命倫理を語る可能性

土井健司

アメリカにおける生命倫理の誕生は一九七〇年前後であると言われるが、その前後しばらくキリスト教神学者の影響は大きいものであったし、また目立つものではないが、今日でも一定の影響力は認められる。生命倫理の問題がそもそもキリスト教にとって何であるのかという視点からするなら、キリスト教が復活、永遠の命をはじめとして「いのち」の問題を根本において説く以上、それはその本質に関わる問題であるはずである。歴史的には、とくにカトリック教会では善行の問題との関連ですでに十六世紀以来医療倫理が論じられてきた。

さらに、近年の学説では、ローマ帝国内で三世紀後半にキリスト教が飛躍的に拡大した理由は疫病の蔓延に対する看護であったという。一つには看護によってキリスト者の死亡率が減り、また死亡率の減少がある種「奇跡」として入信者数を増加させたからだと考えられる。エウセビオスの『教会史』に見られるように、そのさい死にゆく者、死者への世話はキリスト者に特徴的であった。この看護はキリスト教における愛の実践と